

コラム

みやちゃん と ご一緒体験記

Vol.17

【薬のことは薬剤師に聞け! ~地味にスゴイ縁の下の力もち~】

医療ドラマが好きなので毎週木曜日夜10時放送の「アンサング・シンデレラ 病院薬剤師の処方箋」を楽しみにみえています。このドラマ、コロナ禍のあおりをうけ撮影が中断していましたが、ようやく軌道にのり放送再開となったようです。

ドラマの主人公・葵みどり（石原さとみ）は病院薬剤師として忙しく働いています。この葵さんは「薬剤師は薬をだして終わりではない」をモットーに、入院中の患者さんの所によく足を運び、薬を正しくちゃんと飲んでいるか副作用があらわれていないかなどを確認し、あれこれ相談にのる親切かつおせっかいなお姉さん薬剤師です。院内の他の薬剤師はというと、そうではありません。職場があまりにも忙しいため、一人の患者さんのために時間をさくことを良しとしない方針をとっているのです。だから、葵さんはよく先輩や上司に注意されます。

劇中、調剤室の激務が描かれ、薬剤師たちは次から次へとはいつてくる処方箋に目を通し、薬を調剤しています。患者数が多いほど処方する薬が多く、迅速に処理しないとクレームがでるため、まるで工場のラインのようです。紙に書いてある通りに薬をだせばいいのなら薬剤師でなくてもできるんじゃない?なんて思う方がいるかもしれませんが、もちろんそうではありません。薬剤師は医師が処方した薬が患者さんにとって適切かどうか判断し、まちがった処方をしていればドクターに異議を唱えることができる唯一の医療者です。実は「疑義照会」事例は大変多いそうです。しかし、医療システムピラミッドの頂点に君臨するのはドクター。患者さんを診察・治療するのはドクターで、患者さんの病気が治った場合、治したのは「ドクターのおかげ」となるのです。

ドクターの指示にしたがって薬をだすわけですが、薬のことをよく知らないドクターも存在するのは事実です。適切でない薬をだしたり、使用量をまちがえることで、副作用がおきたり病気が悪くなることがあります。それを予防するのが薬剤師の使命なのです。そう、患者さんにとって薬剤師は「最

後の砦」といっても過言ではありません。

薬については何でも知っている「薬のプロ」ですから、葵さんは時々ドクターに意見します。力関係がわかっているのでやんわりと。薬をだすためにはドクターの許可があるので意見をもとめると「医師がいないと薬もだせないのかあ〜」と嫌みを言うドクターも（劇中では）います。疑義照会を指摘すると、ドクターの機嫌をそこねないかと薬剤室で困るシーンもあります。ドクターに気を遣いながら働かざるをえない薬剤師の立ち位置が描かれています。その一方で、薬剤師の意見に耳を傾けてくれるドクターもいて、助言が正しかったとして信頼を得られることもあります。

医療の現場のあれこれが興味ぶかく描かれますが、誰の目にも、頼られる存在としてのドクターや親しまれる存在のナースよりも、薬剤師は影のうすい存在といえるでしょう。言うまでもなく、患者さんと接する頻度が少ないからです。

前の回では、入院した他の病院のドクターが、「薬剤師は医者の子隷」といっていましたが、このドクターは自分の知識を過信して多剤服用していることに気づかず、認知症になったと思悩んでいました。それを見ぬき救ったのが、薬剤師の葵さんです。

他職種のプロがチームとなって働く医療現場では、誰が偉いとか誰の意見が絶対とかいったことは（本来）あってはいけないもので、誰だってミスはするし、知らないことはある。その道のプロの知識を尊重し他職種連携でいくのが理想だと医療の現場外にいる私は思うのですが……。

「アンサング」とは「ほめられない」という意味。ほめられないけれども、医療の現場で縁の下の力もち的存在として患者さんを救うヒーロー！といえますよね。ヒーローといえば、昨年放送された月9ドラマ「ラジエーションハウス 放射線科の診断レポート」では、天才放射線技師（演じたのは窪田正孝）が、ドクターが見過ごした患者さんの病を探りみつけることが多々ありましたね。ここでも現場ではよくひと悶着がおこっていましたよね。

“地味だけドスゴイ人”、それが「アンサング……」のヒロイン葵さんです。「地味」といわれることに抵抗がある人はこの仕事は向いていないしおススメしません。ところで、「地味」でなにかいけないのでしょうか？“派手だけド実はちっともたいしたことない人”よりもカッコいいと思いませんか（フレッシュマン向けコラムのようになってしまいましたが）！

そういえば、少しまえに「地味にスゴい！ 校閲ガール 河野悦子」というドラマが放送されていて、この主人公も石原さとみさんが演じていました。私が属する出版界では、この校閲者が地味にスゴ〜イ仕事をしてれています。彼（彼女）たちのところに届いた書き手の原稿は、ここで念入りにチェックされ活字として世に出ていきます。世にいう「売れっ子ライター」の生原稿が赤ばかりというのは珍しいことではありません。校閲者が手をいれて読み手へ届けているからなのです。赤字だらけでギャラをいただいている書き手は感謝すべきですよ。

葵さんは院内を走り回り、浅草の薬局薬剤師、“みやちゃん”こと宮原富士子さんは、愛する地域住民の健康を守るために走り回っています。ポリファーマシーの問題を重視し服薬指導にも注意を払っています。次から次に新しくなる医療や薬を学ぶために、コロナ禍となった現在はオンラインを駆使して勉強会に励んでいるようです。

医療崩壊が危惧される中、がんばっているのはドクターやナースだけではなく。病院、薬局、ドラッグストア、施設など全国の現場で働く薬剤師の皆様、毎日ご苦労さまでございま〜す！やはり、薬のことは薬剤師に聞こうっと！

